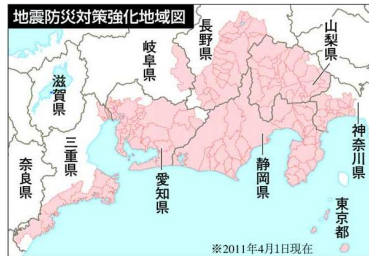


# 現金 87%が持ち主へ

## 東北3県届け出42億円

東日本大震災の津波は大量の現金を押し流した。東北三県を被災に届けられた総額は四十二億円のうち87%が持ち主のもとに戻った。東北の義理堅さを物語る一方で、一部では持ち去りもあった。金融機関では、被災した顧客のため支店独自の判断で現金を手払いした銀行も。力をめぐるさまざまな出来事を追った。(赤田千秋)

岩手県大船渡市の仮設住宅に暮らす山本ミヨ子さん(68)は震災から一カ月後、大船渡で自宅から流された金庫を戻した。若い職員二人が塩水で濡れた扉をため息をつきながら開け、金庫を押し出した。残った現金二種に記念炎を灯し、章広さんが自硬質がシャラシャラ出た家が流された山本さんに「おめでとう、おめでとう」とおめでとうを言っていた。散らばった二万円札を「全てを戻して、住民が集まるのを待たないでほしい」と話した。岩手県大船渡市、陸前高田市などを管轄する。人口六万人の地域で届いた金庫は県全体の半数近い千個、財布などを合わせた届け出は三億円に達する。残りは「結婚式の引き出物で金庫の目録を渡すほど、沿岸部は現金を家に置く習慣がある」と話す。現金取引が多い港町でこの習慣は根深い。宮城県南三陸町の及川章広さん(68)は、津波で父忠男さん(72)津波(68)自宅を同時に失った。忠男さんは水産加工業を営み、ワカメの茎の付け根ワカメ漁師から買い付けていた。震災当日は収穫時期を迎えた。忠男さんは週末の買い付けの



### 東海の金融機関は?

「犯罪の手段に悪用される恐れがある」として匿名を条件に、愛知県内に本店を置く地方銀行が取材に応じた。この地銀は、停電などにより預金処理システムがダウンした場合、手払いを行う。通帳がなくとも印鑑があれば員外が印鑑を照合、払い出し額に制限はない。印鑑がないと顔写真入り身分証明書とキャッシュカードが必要で、払い出しは十万円に制限される。身分証明書もい場合は、住所氏名、電話番号を紙に記入。筆跡を口陣開設時の書類と照合する。開設時の書類はコンピューターが使えない場合に備え、保管されているという。この地銀の現在のマニュアルでは、キャッシュカードがない場合は手払いを受け

### 払い出し 身分証・カード必要

東海地震は予知の研究が盛んで、異常現象が重なる専門家を経て首相が警戒宣言を発する。内閣府は一都七県の百五十七市町村を「地震防災対策強化地域」に指定。各金融機関が対応する。地域内の銀行は言が出る。ただちに業務の停止と閉鎖が義務付けられている。客と行員の安全が優先の確保のため。閉鎖は警戒宣言解除まで続く。予知できなかった地震の発生時は各が閉鎖を判断。近年は地震予知は難しく「とまれ、突然の地震発生に各銀行が対応を迫られる事象も予想される。

## 義理堅い 気質反映 持ち去りも

津波直後、顧客に手払いを実施した岩手銀行の行員は緊急時対応マニュアルに基づいて行動した。大地震の発生に備え、東海地方の金融機関はどのような対応を想定しているのか。



津波を流された大量の現金が警察に届けられた岩手県大船渡市で。山本さんは「残高を十回多額引き出した人も返して来てくれた。沿岸部の人は法律家だった。返り返る。人々の誠さは、自ら被災しながら手払いを続けた人々が頼るのが銀行員にとって今も励みになっている」と話した。

山本さんは「残高を十回多額引き出した人も返して来てくれた。沿岸部の人は法律家だった。返り返る。人々の誠さは、自ら被災しながら手払いを続けた人々が頼るのが銀行員にとって今も励みになっている」と話した。

次回は12月19日掲載。津波警報について考えます。



金融機関の窓口再開は意外に早い。一〜二週間で乗り切る分があれば、家族構成によるが数万円から十数万円だ

命が助かってても、お金の問題が多く被災者を苦しめている。ファイナンシャルプランナーの内藤真弓さんに被災後の生活再建について聞いた。  
(聞き手・林勝)

ファイナンシャルプランナー

## 内藤 真弓さん

### 生活再建のために―識者に聞く

ろつ。避難所の生活なら支援物資があり現金はあまり必要ない。

―生活再建には貯金が頼りになる。

貯蓄が誰の口座にどれほどある

る。

―被災者にとって最も切実な問題は。

生活再建の資金。財政が厳しい

国の公的支援は十分とはいえず、

便利だ。

## 家族の口座把握を

か、家族内で確認しておくことを勧めたい。お金を管理する人が亡くなると、残された家族が困る。金融機関名と口座番号を書いた紙を共有するといふ。保険契約の情報も書いておくとき

自分で何とかするしかない。宮城県沿岸部のある人は退職金で家を建てたが、津波で全壊。耐震性の高い家だったので地震保険に入っていない。生活を立て直せない悲惨な状況に陥っている。

―地震保険に入る必要性をどう判断したらいいか。  
持ち家でローン残高が相当額ある▽貯蓄が少ない▽非常時に身を寄せる親戚や知人がいない―という世帯は、再建までの資金繰りや居住先の確保で困難が大きく、地震保険が頼りになる。

地域で異なるが、一般的な木造一戸建てで一千万円の地震保険に入ると保険料は年間一万〜三万円。六割の世帯が火災保険に入っているが、地震による火災は補償対象外。地震保険は単独で加入できず、火災保険とセットで契約するが、その率は低い。―いくつも保険に入るのは経済的に苦しい。

火災保険は「火災」「落雷」のほか「盗難」「物体の衝突」などの補償がついているものが多い。生活再建に必要な補償に絞れば保険料は減らせる。生命保険も見直して保険料負担を減らせれば、地震保険に回せる。

地震保険は国も保険金の支払い義務を負う公共性の高い保険。これまであまり理解されず、十分に普及していなかったが、震災後は急激に契約が伸びている。

## 志望校決定「運命の日」

11月20日投票の大熊町長選は、町への帰還を目指す現職と移住を訴える新人の一騎打ちだった。町の将来を担うはずの選挙はしかし、中途からその様相を変えた。「あの人はただの目立ちたがり」。新人候補の悪い噂が仮設住宅に広がり「安全策」で現職に票が流れた。「(現職勝利

は) 町民が帰還を望んだ結果じゃない」。少なくとも幸さんにはそう思えた。周囲が静けさを取り戻した2日後、今度は一家の「運命の日」が来た。沙也加さんの高校受験の三者面談。私立との併願を勧める担任に沙也加さんは言い切った。「行きたくない高校は受けたくありません」。担任も幸さんも折れるしかなかった。揺れ続けた思いは定まったらしい。すっきりした表情で勉強機に向かっているのは、仮設

原発1キロからの避難  
いつの日か  
—25—

住宅の薄い壁をつたってくる候補者の連呼が収まったからだけではないようだ。受験先はあこがれだった光一さんの母校。原発事故以降、県内各地に分散していたが、来年度からいわき市内に集約される。一家は抽選で確保した市内の仮設住宅に移る計画だが、高校から7～8\*。と遠く、交通の便も悪い。幸さんは高校に近い仮設に変更できるか役場に相談したが、「無理ですね」と即答

された。意気消沈する幸さんに沙也加さんは諭すように言った。「世の中、そんなもんだよ」  
【(はなわ)さん一家】 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生生活。